223 Ach負荷により誘発される冠動脈 diffuse vasoconstriction時のTl-201心筋分布の検討

坪川明義，近藤真言，安部美輝，谷尾仁志，霜野幸雄
（市立島田市民病院循環器科）

Ach負荷試験時にみられる冠動脈の diffuse vasoconstriction（DVC）の意義をTl-201心筋SPECTを用いて検討した。 冠動脈3枝各々3箇所で血管径を負荷前、中、NTG後測定した。AchにおいてDVC確認後にTl-201を静注して心筋SPECTを施行した。 DVCを5例に認めた。DVCを認めた5例は①自然発作時のECG変化なし ②Ach負荷時ECG変化なし ③胸痛も比較的非典型的 という臨床像を伴った。この5例中4例に、Ach負荷をおこなった冠動脈の支配領域にTl-201心筋分布の異常を認めた。 DVCがTl心筋分布異常をきたすことから、心筋虚血の陽性所見と考え治療を必要とすべきかどうかは、症例の臨床像を考慮するとさらに検討が必要である。

224 βブロッカー投与による心不全の改善がMIBG像の改善を伴った拡張型心筋症の一例

田中 健、相澤忠範、加藤和三、岡本 淳、細井宏益
（心臓血管研究所）

48歳男性 1986,88,89と服薬状況は良いものの心不全を繰り返していた。心胸隔比は68% 、心電図はCLBBB,心房細動、Holterでは心室類拍(max 17 beats)、超音波像はLVDd/ LVDS=71/62であった。メトプロロールを20mg投与して臨床的改善が得られた。超音波像や胸部写真には著変を認めなかった。治療前のMIBG像の中隔ではMIBGの一様な取り込み低下が認められた。治療開始5ヶ月後のMIBG像において、心基部中隔では%MIBG uptakeは 75%から 88%へ、心尖部中隔では 81%から 92%へ増加を認めた。

MIBG像は拡張型心筋症の病態評価に多大な寄与をすると考えられた。

Presented by Medical*Online